題名「介護しているおばあちゃんを見て」

氏名　島田　幸子

私には大好きだったひいじいちゃんがいます。ひいじいちゃんは足腰が悪くベッドで寝たきりでした。そんなひいじいちゃんのお世話をしていたのがおばあちゃんです。

介護しているおばあちゃんはとても大変そうでした。例えば、1人で何もできないので爪を切ってあげたり、食後にはタライに水を入れて歯みがきできるように準備したり、着がえを手伝ってあげたりとすべてしていました。中でも私が1番大変そうだと思ったのは排泄のお手伝いと夜だけオムツをつけていたのでその交換です。排泄はトイレではなくポータブルという1回使ったら中の袋を交換しないといけないものでした。もちろん良い匂いなわけないし、普通だったらさわりたくないと思ってしまいます。こんな大変なことを1日5回以上していたおばあちゃんは本当に尊敬します。また、おばあちゃんは1番食事に気を使っていて、ひいじいちゃんは入れ歯で硬いも

のが食べられませんでした。そんなひいじいちゃんでもきちんと栄養がとれるようにミキサーですりつぶしたり、柔らかくなるまで煮込んだりとすごく工夫をしていました。ですが、少しずつひいじいちゃんの食欲が減ってきて半分以上残すようになりました。そんな時でもおばあちゃんはあきらめずに野菜ジュースを作ったりしてひいじいちゃんに食べてもらおうと、毎日毎日、試行錯誤をしていました。しかも、食べ残りがあったら普通は「こんだけ考えて作ったのにダメか。」と落ち込んでしまいそうですが、おばあちゃんは「あ～ダメだったか。」と笑って、「次はどうすれば食べてくれるかな？」とすごく楽しそうでした。これはおばあちゃんが優しい性格だからできることだなと思いました。また、私も何か手伝いたいと思いひいじいちゃんのところへ食事を運んだことがあります。その時にひいじいちゃんに「ありがとう」と言われたのがとてもうれしくて、またやってあげたいと思ったことを今でも覚えています。いつもひいじいちゃんは何かしてもらうたびに「ありがとう」と口にしていました。この一言で介護

した側はおばあちゃんだけではなく他の人もみんな笑顔になっていました。このひいじいちゃんの「ありがとう」という一言が介護する側の力になっているということを実感しました。

今回、ひいじいちゃんや介護していたおばあちゃんを通して、介護はだれでも簡単にできるものではないし、介護する側もされる側も思いやりの気持ちを持つことが大事だと感じました。介護とは思いやりの精神であふれているものだと思うし、その精神が社会に広がっていけばいいなと思います。いずれ私も介護をしないといけないときがくるので、その時はおばあちゃんを見本に介護される身になって考え、思いやりの心をもって接したいです。

題名　「介護施設に行って感じたこと」

氏名　中村　綾花

私は、「介護」という仕事はとても大切なものだと思います。

私が初めて「介護」という仕事を知ったのは小学3年生のときの夏休みでした。友達の家に遊びに行ったときに、隣に新しい建物が建っていて、聞いてみると、介護施設だということを教えてくれました。「介護施設」というものがどのようなものか、聞いた当初は分かりませんでした。けれど、友達はよくその場所に行っていると言っていたので、その日に私も一緒に行きました。そこには、当たり前だけれどたくさんのご高齢の方がいました。私にとっては初めての場所で、とても緊張していたけれど、入ってみると、明るい雰囲気で、気さくな人達ばかりのあたたかい場所でした。そのこともあって、私はたくさんのご高齢の方と交流することができました。例えば、ちょっとした遊びをしたり、普通にお話したりしました。

私は、ここに何回か通っている中で、思ったこと

があります。私や友達は、基本的にはご高齢の方と遊んだりしていたけれど、ふと周りを見ると、他のご高齢の方に介護士の方がついていて、「ここちょっと段差あるから気をつけてね。」などと声かけをしながら支えていたり、ご高齢の方が車いすに乗るのを手伝っていたりしました。このような光景を見ていると、ちょっとした介護士さんのサポートが積み重なって、ご高齢の方々にとっては大きな支えとなり、あのような明るく楽しそうな雰囲気ができているんじゃないかと思いました。だからこそ、ご高齢の方々の助けとなる「介護」という仕事はとても大切なものだと思います。

私は、この介護施設へ行ったときに感じたことや気付いたことをふまえて、これからやっていきたいと思うことが2つできました。

1つ目は、将来家族の介護をすることです。私の家にいる祖父母は今も元気だけれど、将来体が不自由になったときなどに、それまで私を支えてくれた恩返しとして今度は私が祖父母を支えたいです。

２つ目は、介護についての知識を少しでも身に付けることです。これは、これからやっていきたいことの1つ目の、将来祖父母の介護をしたいというのを実現するために、まず私が介護について知らなければいけないんじゃないかと思ったからです。介護についての知識を身に付けておくことで、何か起こったときでもなるべくあせらずに対応したりできるようになりたいです。介護施設に行って感じたことをふまえて、これからやりたいことを実現できるよう頑張りたいです。

題名「たくさんのサポート」

氏名　清水　理乃

二年前、私の曾祖父が八十八歳で病気になり、亡くなりました。病気になるまでは、とても元気で毎日朝早くから田んぼや畑仕事、シルバー人材センターの仕事など休むこともない働き者の優しい曾祖父でした。

ある日、食欲がなくなり病院で検査すると胃に腫瘍が見つかり手術を受けることになりました。手術後は食欲も戻り、以前まではいかないけれど、少しずつ元気を取り戻し、畑仕事や趣味を楽しんでいました。しかし、十か月後再び食欲がなくなり病気が進行し、徐々に体力も落ちていきました。自分で動くのも難しくなり、入院したほうがいいのではないかと言われたけれど、曾祖父は病院に行きたくないといいました。コロナ禍で家族の面会もほとんど出来ないこともあり、その言葉を聞いて祖母や看護師をしていた私の母が出来る限り家で過ごさせてあげよう、と家で過ごすことになりました。母は以前働い

ていたところで在宅生活をサポートする仕事をしていました。在宅での生活をサポートしてくれる制度を利用するために介護認定を受け、ケアマネージャーと相談し介護ベッドなどを準備したり、通院が難しいので、自宅に医師や看護師が来てくれるように調整したりしていました。そして、在宅生活がスタートしました。病院の看護師が家に来て点滴をしてくれるので、その後、母が点滴がちゃんとできているか見たり、体を温かいタオルで拭いたり、オムツを変えたり、体の向きを変えたり、口の中をきれいにしたり、痛みや吐き気を抑える座薬を入れたりと色んなお世話をしていました。病気の進行が早く、数日しか家で生活できず入院となりました。数日だったけれど、曾祖父は家で家族と過ごすことができてうれしかったと思います。曾祖父は毎日仏壇のお参りをして感謝していました。私は、物心ついた時から、毎日仏壇に手を合わす習慣があったけれど、曾祖父が亡くなってからは、家族みんなで仏壇に手を合わせ、曾祖父母の遺影にも手を合わせています。私のことをずっと見守

ってくれているように思います。

私の母は看護師の経験を生かして祖父のお世話をできてよかったと話していました。看護や介護は人のお世話をする仕事でとても大変な仕事だと思います。母は、患者さんや利用者さんのお世話をして「ありがとう」の言葉を聞いたり、患者さんが元気になってくれたりすると、大変だけれどやっていてよかったと思うし、また、亡くなる方も安心して最期を迎えられると、悲しいけれどよかったと思うと話していました。

曾祖父のことで、病気になっても家で生活できることを知ったし、色々なサポートがあることを知りました。色々、経験することで将来どこかで生かせることができればいいなと思うので、私はこれから、色んなことにチャレンジしていきたいです。